保健室の眠り姫

メイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
保健室の眠り姫

【Ｎコード】
Ｎ１６９５Ｓ

【作者名】
メイ

【あらすじ】
――保健室の１番奥のベッドには、身体の弱い女の子がいつも眠ってるんだって――。
”保健室の眠り姫”。そんな意味不明な噂が立っている北守中学校。まだ入学したばかりの病弱な１年生、綺麗な女の子がいつも眠っている。例の眠り姫と同じく１年生で保健委員であるオレがいつ保健室に行っても、眠り姫なんて居なかった。だけどある日、そいつはそこに居たんだ――――――…

保健室の眠り姫・登場人物（話が進むにつれ追加されます）

霧島（きりしま）　謎（めい）

性別……女
身長……１４８ｃｍ
体重……４２ｋｇ
血液型…Ｂ型
誕生日…８月１２日

北守中学校１年４組１２番。文芸部。保健委員。
複数の持病があり、かなり病弱である。
過去には治療の為に総合病院に長期入院していた。
学校は休みがちで、保健室の常連。保健室の１番奥のベッドが定位置。
「保健室の眠り姫」と密かに噂になっている。
色白で小柄。ストレートの長い黒髪が日本人形のよう。割と小奇麗な顔立ちをしている。
行動や言動がかなり不思議で突拍子もない変人。
周囲に合わせる事が大の苦手で、集団行動が嫌いな一匹狼。
クラスでは異端児の部類に入っている。問題を起こしている訳ではない。
高校生の姉がいるが怠け者なので、謎がしっかりしている。
趣味は小説を書くこと、特技は料理などの家事全般。

瀬川（せがわ）　香織（かおり）

性別……男

身長……１６８ｃｍ
体重……５２ｋｇ
血液型…Ｏ型
誕生日…４月２日

北守中学校１年５組１８番。陸上部。保健委員。
女っぽい名前を幼い頃から密かにコンプレックスに思っている。
運動神経が飛びぬけてよく、スポーツは全般が得意。
伸ばし放題で目が隠れそうな程の黒髪に整った顔立ち。
背が高く、脚が長い。細身だけど筋肉質。
そんな外見からか、学年の女子からは人気がある。
だが本人はそういうのが嫌いなので、告白等も受け入れた事がない。
口が悪く不器用。素直じゃない。根は優しい。
３つ下の弟がいるので面倒見がいい。
趣味は弟と遊ぶこと、特技は走ること。

櫻井（さくらい）　有嘉（ありか）

性別……女
身長……１５８ｃｍ
体重……４７ｋｇ
血液型…ＡＢ型

北守中学校１年１組１４番。吹奏楽部。委員会は無所属。
小学生からの謎の親友。突拍子もない変人の謎に付き合えるのは有嘉のみ。
明るく友達が多く陰口も叩かれない。親しみやすい性格で人気者。
少々姉御肌な面もあり、男子でも話しやすい性格。
協調性も大いにあり、謎とは正反対。

内側に癖のついたセミロングの髪と、大きい目の女の子。
身長が高いが、それなりに可愛い雰囲気を持っている。
３つ下の弟がおり、香織の弟と同級生。

病弱体質少女の試行錯誤

身体が重い。頭がガンガンと、鼓動に合わせて痛む。胃や腸の中が掻き混ぜられる様な嘔吐感。
幾度となく経験したそれに、私は今も耐える。

幼い頃から身体は弱かった。
私、霧島謎（きりしまめい）はただの女の子としてこの世に生を受けた人間だった。ただ身体が弱いだけで普通では無いが生きていた。何年か前に重い病にはかかる、入院だの何だの、学校は休みがちだった。病にかかった当初は命が危なかった。
人間は誰しもいつかは息絶える日が来る。だけど生まれてから死ぬまでの平均があるとしたら、私の生涯は平均の半分も無い気がした。
少し走れば身体の鼓動が悲鳴を上げる。少し身体を冷やせば熱が上がる。面倒極まりないこの身体の仕組みに、私も私の家族も振り回されていた。今日も私は学校で体調を崩し、今こうして保健室のベッドに連行されてきているのだった。

こんな身体に産んだのは誰？

それは母親だ。だけど母親は悪くない。何故なら、母親だって娘をこんな弱っちょろい身体に産む予定をスケジュールのメモ欄に書いていた訳では無いし、母親の子宮に導入された最新式アンド●イドａｕの画面の“虚弱体質”という選択肢を私がポチっとやった訳でもなく、全ては偶然に過ぎないからだ。そして過去には戻れない。１度そうなってしまったものは大概取り返しのつかない訳で、それは十分過ぎる程に分かっている。だから私は何も恨む事はない。泣

いても喚いても嘆いても、その辺の現実はどうにもならないのだ。大体「何で私をこんな身体に産んだんだよ！？」なんて言われる母親だって騒音よりいい迷惑である。それで母親を責める程、私は子供でもない。だから私は、ただただその現実を受けとめて、生きて行くだけ。

そんなことを考えるうち、意識を失った。

誰かの気配を感じた。

だけど私は眠っている筈で、気配もくそも感じ取る訳無いのだ。

え、何これ。どんな状況？　私起きてんの寝てんの？　それとも明晰夢？　分からない。

気配がある。んじゃそれ誰？　保健室の先生はカーテン開けて様子みる位の筈。だけど気配はこんなにも近くて様子見ってもんじゃない。

じゃあ誰？　いつも迎えに来てくれる友達の若葉ちゃん？　だったら私の事を揺り起こすと思う。

近くに居て。起こさずにそこに居て。黙ってる。

「……誰――――――？」

思っていた事が声になったらしい。

「え、うわっ！！？」

気配の正体であろう人物が驚いた声を上げた。それで完全に覚醒したらしい。私は目を開けた。

「……」

あ、眠りに着く前のだるさとかが消えてる。ラッキー。でもまだやっぱ本調子じゃ無いなぁ。

初めに視界に入ったのは天井――――――、じゃない。誰かの胴体の部分だ。私が保健室のベッドの横向きに眠っていたから、視界に入ったのは横で気配を感じていた誰かさんだった。

胴体って言ったらもげたみたいでむごいけど、実際胴体から上に

私の目がいかないだけで。
「……あー、香織くんだ」
横向きの状態から仰向けになると、その誰かさんの顔までちゃんと視界に映った。
小学校が一緒だった、隣のクラスの瀬川香織くんだった。あ、断じて”瀬川香織ちゃん”じゃありません。っていうかコレ本人に言ったら多分殺されるよ。
「あ、お、おう……起きたかよ」
腕まくりしたYシャツに紅色のネクタイ、紺色の袖無しのベストに黒いズボン。伸ばしっ放しっぽい黒髪に整った顔立ちをしている彼は、確か女子に人気があった。香織くんは細身で長身だから、私的にはどうも細長いあんちゃんにしか見えない。実際香織くんは足と首が長い。特に足が長いっていうのはかっこいいと思う。というか香織くん本体かっこいいと思う。ぶっちゃけ言うと彼を見る度にどきがむねむねしている。これ恋かな。うーん、どうだろうねぇ。
小学校のクラスで１番背が高かった、そして今もそうであろう彼の顔を横向きのまま見るのは難しい。こいつ何ｃｍあんだよ。私も香織くんも中学１年生なのに。私はまだ１５２ｃｍしかない。たしか香織くんは――――、いくつだ。
「香織くんって身長何ｃｍ？」
僕は仰向けに寝たまま彼の顔を見て尋ねた。
「は？　……１６８」
「でかっ」
「……御前さぁ、もっと他に聞く事無いの？」
「え、他かよ」
無理無理分からんよ。私の思考回路どうせ常人と違うんでしょ。
「何でお前ここに居んの、とか」
「あ、それだ！　何で香織くんここに居るの？」
「言われてからじゃ遅ぇよ」
「何だよー」

でもマジで何でここに居んのよ香織くんは。
ここは2階で。保健室で。カーテンの中で。ベッドの右脇ですよ。まず保健室の常連ってのが私しか居ないし。この学校。そのせいで入学早々サボり疑惑浮いちゃってるけど。
「何、香織くんも体弱いっけ？　でも陸上部入ってるからそれは無いか。じゃあ何、サボり？」
「ろくな理由が出てこねーな御前は」
「って事は他なんだ」
「そうだよ。つーか御前は何でここに居んの？」
「は？　えぇ？　それを今更聞いちゃうのか」
「だって知らねーもん。何なの」
「体調悪いの。具体的に述べると嘔吐感、頭痛、倦怠感」
「……へぇ」
香織くんはベッドのカーテンをざっと大きく開け、ベッドのスペースから出て行った。……は、いいけどカーテン閉めてくれないんだ……
「……御前、今何月だよ」
「今？　6月上旬で入学してからぴったり2カ月ですがそんな事も分からないのか瀬川香織くん平和ボケ？」
「うるせぇ。誰がボケだこの貧弱」
あ、怒っ……いや怒ってないな。ただ反撃してるだけか。つか貧弱言うな。
私はよっこらせと身体を起こし、ベッドに座った状態になった。
「まだ入学して2カ月だろ、御前の保健室の利用回数半端ねぇよ。何だよこの多さ。トータルで14回とか」
テーブルに座った香織くんが保健室利用者の名簿を勝手に見ていた。どうせなら椅子に座れよ。
「どんだけ身体弱いの？　御前」
「どんだけってその名簿見りゃ実感できんでしょ。悪かったな病弱で。っていうか知ってるでしょ」

「うん。小学校同じだった時御前かなり休んでた」
「だったら聞かなくても――っていうか香織くん何でここに居るの？」
「保健委員だから」
あ、マジで？
「いやその割には僕が保健室来た時居なかったんですけど」
「うまーくオレが居ない時に御前が来てたんじゃねーの」
「いやそりゃねぇよ」
変な人だな瀬川香織。私もだけどね。
「あのさ、私も保健委員なんだけど」
「は？」
香織くんは目を丸くして私の顔を見た。さっきまで名簿見てたけど。彼がどかっと座っているテーブルと私のいるベッドは、カーテンが無ければ会話は差し支えないらしい。
「え、御前が？　保健委員？」
「んだよー。」
「いや、だって御前、これまで委員会に出て無かったじゃん」
「うん出た事無いよ。見事に全部休んだ日と被ってたからね」
「……何それ、どんなだよ……」
香織くんは次はちゃんと椅子に座った、けどテーブルにぐったりと持たれてしまった。
「どんなだよってこんなだよ」
香織くんはカーテンをまたしても乱雑にざっと閉めた。
「まだ授業終わるまで２０分あるから」
カーテンの向こうから香織くんの声。
「まだ寝てろ」
やけに響くような低い彼の声がかっこいいな、と思った。

オレの世界を塗り替えた彼女

『保健室の眠り姫』。

クラスで時折ひそひそと噂されていた。保健室の奥のベッドには女の子が眠ってる。その噂は実話が元で、実際かなり頻繁に保健室を利用してる身体の弱い女の子がいて、その奥のベッドでよく眠ってるって事らしいけど、そのご本人が誰なのかまではオレは知らなかった。

オレはまだ中学校に入ったばっかの1年で、保健委員になった。特にこだわってはない。2学期にやんのは嫌だから初めにやっとこうと思っただけだ。だからよく仕事に来てたけど、奥のベッドに例の眠り姫は居なかった。噂は宛てになんねーんだなって思ってた。

そんな入学して保健委員の仕事にも学校生活にも慣れてきた6月。いつもみたいにベッド周りの掃除でカーテンを開けたら、居たんだ。

眠り姫が――――――

噂通り、彼女は奥のベッドに眠っていた。

それは霧島謎だった。

謎は小学校が一緒で、親しくは無かったけど少しは話してた。何だか言動や行動が変で、いや頭がイッちゃってるって意味じゃないけど、突拍子もない爆弾発言をして変な事を突然やり始める。オレは不思議な人だと思ってた。周りの女子がグループを作ってトイレとかに集団で入ってる中、謎だけがいつも1人で居た。だけど友達が居ない訳では無くて、友達と話しながら笑ってたりするのも見た事がある。何だか中学に入ってからはよく意味もなく校内を散歩し

てた気がする。その変で不思議な性格で彼女は変人として密かに有名だった。

仰向けに眠る彼女の、胸まで伸びた真っ直ぐな髪は結ばれていなかった。オレの通うこの中学には”肩より下に伸びた長い髪は結ぶ”って校則があった筈だったけど、謎は大体いつも守っていないらしい。顔が白くて、というか白過ぎて顔色が悪かった。だけど小奇麗な顔立ちだった。閉じられた目の睫毛は長くて、何だか目が離せなくなった。いけないと分かってたけど、オレは彼女の枕元に立ったまま彼女の顔を凝視していた。

何故か不思議な感覚に囚われた。うまく言えないけどなんか、彼女が人間ではないような気がしてきた。人間以外の何か、違う生き物。未確認生物。不思議で変な謎には、失礼だけど人間ってよりも未確認生物っていう方がしっくりきた。

そして。

「誰――――…？」

まじまじと彼女を見つめていると。彼女は目を覚ました。

「えっ、うわっ！！？」

あの時、初めて謎とまともに、長く話をした気がする。

謎は思ってたよりも変人で、病弱だった。保健室の利用回数は断トツで全校のトップで、２ヶ月に１４回も来ていた。こいつは週末である金曜か週の始まりの月曜に体調を崩す事が多いらしい。

”うん、委員会出た事無いよ。見事に全部休んだ日と被ってたからね”

道理で保健委員会があるのは月曜だから、委員会に来ない訳だ。

偶然なんかではなかった。

あれからオレは、何故だかいつでも謎の事を考えるようになった。授業中も放課後も帰宅中も。謎の顔が、声が、仕草が、頭から離れない。

よくわからない気持ちを抱えたまま。

オレは今日も保健室に足を運ぶ。

隣同士の病人

視界が曇ってくる。

冷や汗が止まらない。身体に力が入らない。呼吸が浅い。ふらつく……典型的な貧血の症状だ。またか……やっぱ寝坊したからって朝飯食ってないのが駄目なんだな。私のバカ。病弱体質な為にいつも大活躍の薬を入れたポーチを握りしめて先生に事情を言うと、「保健室に行って来なさい」の一言だった。途中で保健の先生に会い、断ってから保健室に行った。

さっき断ったから、先生はいないが普通に入る。２つあるうちの奥のベッドのカーテンを開けて入り、閉める。薬ｉｎポーチ（笑）を枕元に置く。上靴を脱いでベッドに上がり、そのまま横になって布団を掛け目を閉じた。

っていうかいつも奥のベッドだな、眠んの。

小学校の時も保健室の常連だったけど、いつも奥のベッドだった。やっぱり他の生徒が来るかも知れない事を考えると、手前の方のベッドは寝たくない。何せ保健室の眠り姫とか言われる位に常連だから、クラスの皆も私を煙たがってるんだ。そんな立場で見つかりたくない。小学校の頃も多分、無意識にそう思ってたんだろうな。

「……謎？」

「むぇ？」

いきなり隣から声がして、私は間抜けな返事を返した。

「だから、霧島謎だろ、あんた」

どうやら声は隣のベッドからだ。カーテン越しに、低い声。

「Ｔｈａｔ、ｓ　ｒｉｇｈｔ！」

「何で英語なんだよ」

突然名前を言い当てられて、それが御名答だったら英語使いたく

なるでしょ。てか、マジでこの人誰だ。えーと、確か……
「あ。わかった。香織くんだ」
「当たり」
何のクイズだよコレ。
私は仰向けに寝ていた身体を右に向けた。隣のベッドは右にあった。
「っていうか。どうして私だって分かんの？」
「保健室ってな、よっぽど体調悪くないと普通誰も入ってこないの。なのに普通に入って来るってったら御前だけだろ。あれだろ。御前、特例でいつでも保健室来ていいんだろ？　身体弱いから」
「え、そうだけど。態々小学校の保健の先生が中学校の保健の先生に私の病状説明してくれて……って何で知ってんの」
「誰かから聞いた」
誰だそいつ。シメんぞ。個人情報を。
このカーテン越しの会話、何か妙だな……
「香織くんもベッドで寝てるの？」
「そう」
「どうしたんだい瀬川さんよ」
「貧血で倒れた」
「あ、同じ同じー」
「ゲッ、マジ？」
「何で嫌がるのよ」
「あ、いや。っつーか、貧血がこんなに辛いと思わなかった」
「ぼくちゃん慣れちったよー」
「御前はな。オレは違うんだよ」
「薬いる？」
「は？」
「貧血の薬持ってるよ。私」
「……んじゃ貰う」
「じゃ私も飲むー」

私がまだ起き上がらない内に、ベッド周りのカーテンが開いて、香織くんが現れた。
「香織くん起きんの早っ」
「まーな」
まーなって……

それから保健室の椅子に隣同士2人で座って、テーブルにポーチの中の薬を全部ぶちまけた。
「……かなりあるな、薬」
「えーと。咳止めに鼻炎薬、腹痛薬、頭痛薬、抗生物質、便秘薬、貧血薬、ヘルペス、腰痛薬、熱冷まし、あと」
「もういいから貧血薬くれ」
「あ、はい」
鉄分！　って感じの赤い錠剤を1粒渡す。香織くんはそれを受け取ると、水道まで歩いて行く。
後ろ姿かっこいいな。
「……あ！　酷いぜ最後まで説明聞いてくれ」
私がいきなり立ち上がって香織くんを指差して言う。香織くんは薬を口に入れようとして寸止め、呆れたようにこっちを振り返る。
「やだね。授業出れるかもしんねーんだから」
「えぇー？　やだぁ、香織くん行っちゃうの？　私つまんないー。寂しい。もうちっとここにいてよ」
「……意味分かんない」
香織くんは水道に向き治って薬を飲んだ。顔を横にして蛇口からの水を直接口に入れてる訳だけど、なんか不器用なのか知らんがあんまりうまく飲めてないみたいだった。飲んだ後にはもう口の周りがびたびたで、手でごしごし拭いながらベッドに戻ってどさっと倒れ込むように横になった。
「オレ、次の授業までここにいるから」
そう言って布団を頭までかぶる。

「だからそれまで治せ、バカ」
私はぼーっと香織くんの方を見ていた。
「……まだ、ここにいてくれるんだ」
小さく呟く。聞こえてる筈なのに、香織くんの反応はない。

私が寂しいって言ったから、気を使ってくれたのかな。
そんなはず無いのに、私の心はどうも都合よくしか捉えないみたいで。
胸がきゅうっとなるのが分かった。

私はベッドに戻って、布団にもぐった。何故だか顔が緩んで、自然と笑える。隣に居る彼はどんな顔をしているんだろう。私はどうして笑ってるんだろう。

わかんない。わかんないけど、わたし今、凄く幸せ。

「……ありがとう、香織くん」

複雑怪奇な思考回路

複雑怪奇、挙動不審、分析不能。異常で変で不思議で謎めいた存在。

いつだってそれが霧島謎だ。

オレは謎の事をよく知らない。

病弱で何年も病院に通っていて、文芸部で小説を書いていて、保健室の常連で…身長は１５２?で背の順に並ぶと前から３番目だった。クラスは４組、しょっちゅう学校を休んだり保健室に行ったりする為に成績は悪い。って言っても授業聞いてない割に中の上辺りを保ってるらしい。あと姉がいる。

知ってるのはそれ位だ。

「あ、香織くんだー」

……至極呑気なこの声はいつ聞いても脱力する。

朝の健康観察ファイルを届ける為保健室を訪れると、ベッドの上に霧島謎が座っていた。今日も下ろしているストレートの黒髪が季節的に暑そうだが、いつも真っ白で唇だけ赤いこいつの顔はいかにも病弱なので、その暑そうな髪が合っている。割とこいつの髪は綺麗だ。

謎は、今日は制服のＹシャツとネクタイの上に、袖が余る位の長袖の紺色のベストを着ていた。今日は昨夜からの雨がまだ降っている。初夏にしては少し寒いが、校内で服装を変えた奴はまだ見ていない。

オレは保健室のテーブルの上にファイルを置きながら、奥のベッ

ドの方に向かって言う。
「また居たのかよ。何？　今日は貧血？　微熱？　頭痛？」
「……んーん。腹痛」
無駄にバリエーション豊富だ。
だけど嘘な訳はない。いつもより謎は元気がない。声もか細くなっている。
「何で腹いてーの、いつも貧血多いじゃん」
手前のベッドに座って、奥のベッドにいる謎に向かって言った。
謎は弱弱しく笑うとベッドに入り、布団を首まで持ってくる。オレの方――――つまり右を下にして横向きに寝ると呟く。
「香織くんには分かんないよ」
笑顔で言われるとムカつくな、これ。
「何、変なもんでも食ったの？　それとも冷たいもんの食い過ぎ？　それか――…便秘か？　あ、あれだ。昨日腹出し寝たんだろ」
人差し指を向けて言うオレを見て謎は呆れ顔になった。
「……ろくなのが出てこないね瀬川香織さんは。そんなんじゃ女の子にモテないぞ」
放っとけ。
具合悪くてもいつものスペシャルにかっちーんとくる嫌味だけは健在だ。
「別モテるとかどうでもいい。いいから教えろ、何でいてーんだよ」
「デリカシーねぇなぁ香織くんよぉ……ちっと無神経だぜ？」
「何でいきなり男言葉になんだよ」
「何となくだよばかやろー」
……やっぱりこいつ意味不明だ。
「で？　何なの、腹痛い理由」
謎は一瞬顔をしかめ、声のトーンを落とした。
「言ってもいいけど、絶対引かないでよ。いや引くと思うけど、それをわたしのせいにしないでね」
「めんどくせーな。何なんだよ、言ってみろ」

謎は訝しげにオレを見た後に、何でもない事のように言った。
「……生理痛」
ぼんっ！！！
……という勢いで顔面が爆発しそうになった。それ位、顔が赤くなるのが自分でも分かって、オレは自分の顔を手で覆う。恥ずかしいにも程がある。オレは何を聞いていたんだ。謎に。女の子に。
「お、おま……っあー！　ごめん！　ほんっとごめん！　変な事聞いてごめん！」
必死に謝るオレを遠い目で見ながら謎は目を閉じて、薄く笑った。
「何照れてんの……1時間目、始まるよ。教室行きなよ香織くん」
「あ、あぁ……」
本当に具合が悪そうな謎を心配する気持ちとか、無神経な事を聞いて恥ずかしい気持ちとか。
複雑な思いを抱えたまま、オレは保健室を後にした。
「わたしは、ここでまってるよ」
そんなか細い声が最後に聞こえた気がした。

「待ってろ」

痛い。

これはまずいかも知れない。いつもより、酷い。

「……っ、う」

さっき香織くんが保健室を出て行ってから４５分。もう１時間目の授業が始まって４５分って事だ。

香織くんと話してた時まではまだ大丈夫だったのに。まずい、痛い。お腹が。頭痛も微かにあるし、身体全体が重い。段々と腰も辛くなってきた。

早退しようかな……

だけど今は家に誰もいないし、自力で帰る力も今はもう無い。

どうしよう……

授業終了まで5分。まずこの時間までは休もう……

あと保健室の先生か誰かに言えばいい。

それまでに痛みは軽くなるかもしれないし。

「謎？　……いるか？」

驚いた。

誰かと思ったけど、誰かは分かっていた。この声は、香織くんだ。

「香織くん……」

仰向けに眠っていた私のベッドの横に、香織くんは歩み寄って来る。深刻っていうか心配そうな、そんな顔をしていた。

「何で、香織くんが……」

「さっき、いつもより酷そうだったじゃん、だから……お前、どんどん顔色悪くなってるよ。早退する？」

「したい、けど……無理。家に、誰もいないの」
香織くんが難しい顔になる。
「自力じゃ帰れない……もう、痛くて、だから」
「分かった。オレがどうにかする」
するとそう言って踵を返し、走って行った。
「待ってろ」
1人残された私は苦しさに悶えつつ、唖然としていた。
香織くん、何をするつもりなんだろう。

半径５０ｃｍの世界で君の声が

「帰るぞ、謎！」
約１０分後。
走って保健室に飛び込んできた香織くんがそう言った。
私は驚いて、ベッドに寝かせていた身体を少し起こした。
「え、っ……香織くん、帰るぞ、って」
「あ、まだそのまま寝てろ。オレお前の鞄持ってくるから」
そう言ってまた保健室を出て行く。

……いや、帰るぞ、って？

文字通り、香織くんは私の鞄を持ってきた。そして弱弱しく立ち上がった私を下駄箱まで連れて行く。
「ほら、靴」
私の下駄箱から茶色のローファーを取り、私の足元に投げる。私はお礼を言って上靴からローファーに履き替えた。香織くんは私の脱いだ上靴を私の下駄箱に入れると、自分の黒いスニーカーに履き替えた。
え、どうして香織くんも靴履くの？
香織くんは私の鞄を持ったまま言った。
「送ってくから。ほら、乗れ」
そして私の前に背を向けて屈む。
「……はい？　まさか、背中に乗れって……？」
「うっせ仕方ねーだろ！　お前家遠いんだろ、歩けんのか？」
無理です。
お腹痛いし腰も痛いし微かに頭痛もあるし。身体が鉛みたいに重いです。
「先生とかに言ったら、親が迎えに来れないなら普通先生が送るん

だってな。けど今テスト前で先生忙しいだろ、だから」
……だから香織くんが送ってくれるんだ。
嬉しいけど恥ずかしい。いやだっておぶるって何歳以来ですか、もう……

ここが地方の田舎で、しかも平日の午前中で、人通り皆無なのは幸いだと思う。
「……ねぇ、香織くん。重くない……？」
「さっきからそればっかじゃねーかよ。重くねーっつってんだろ」
だって気になるじゃん。
香織くんは乙女心が解らないのか。
わたしは今香織くんにおぶってもらって、家までの道のりを歩いて（？）いる。コレほんと恥ずかしい。とんだ羞恥プレイだ。人いないからいいけど。
香織くんに歩いてもらってるこの歩道の横は、殆ど森みたいに木が生い茂ってる。狭い車道もヒビが入ってて、やっぱりここは田舎だ。商店街も鄙びいた感じだし。そういう街の雰囲気が、わたしは好きなんだけど。
「寧ろ全然重みなくてなんかぬいぐるみでも担いでる気分なんだけど。お前さ、体重ｋｇ？」
「……聞くの？　それ。４２ｋｇだけど」
「ほらな、軽いじゃん。オレ５２だから１０ｋｇ違い」
「香織くんは……身長高いからよ、１６８ｃｍでしょ」
「お前ちっせーよな、１５２とか」
香織くんの背中って広い。細いから、狭そうだなって思ってたんだけど。やっぱり男の子は違うんだなぁ。
「……ねぇ、あのさ」
香織くんに向かって言うものの、顔がよく見えないのが盲点だ、おんぶって。

「何」
いつものそっけない返事は相変わらずで、わたしはなんか笑えてくる。
「香織くんって、かっこいいよね」
「はぁ！！？」
驚いてるであろう香織くんの声が頭に響く。頭痛が……
「ちょ、香織くん……頭に響くよ。痛い」
「あ、ごめ……っていや、お前が悪いだろ。いきなり変な事言うから」
「だって……そう思っただけだもん」
そう言って、香織くんの肩に頭を乗せる。あったかい。こうしてれば少しは、具合が落ち着く気がする。こうして香織くんの背中にくっつくと、改めて彼が男の子なんだなって思う。背中が硬い――――筋肉質って言うのかな。引き締まってる感じが、全身を通じて伝わる。
照れてまたでっかい声出して飛び退くかとも思ってたけど、わたしが頭をくっつけても香織くんは黙っていた。
「……あったかいなぁ――――…」
空気みたいな小さい声でそう呟く。
「何、寒いの？」
「そうじゃないよ。香織くんは分かってないなぁ……」
誰だって女の子は、できるだけ男の子の傍にくっついていたいって思うでしょ。
「お前はほんと弱っちーな。病弱。バーカ」
「何それ……今更言う事じゃ、ないよ」
「だってめっちゃ軽いし。食ってんの？」
「……食い過ぎって位に食べてるよ。これでもわたし大食いなんだよ？」
「オレはそこまで言う程食ってねぇけど、陸上やってんの」
「うー」

香織くんの首に回した腕を、ぎゅっときつくする。
何だかやるせなくなって、わたしは黙った。
暫くすると香織くんが口を開いた。
「どうかした？」
この声が好きだなって、改めて思う。
この好きな声が間近で聴ける今なら。
隠してた本音が言えるかもしれない。

「……ねぇ、香織くん、」

色づき始めた少女の小さな世界

やっと漏れたような謎の声は、やけに低く重くて。
「何？　どうかしたの？」
そう繰り返し尋ねてくる俺の声も、少し不安そうな色が混じっていると、自分で思った。
謎がこれから何を言おうとしてるのか、それがオレには分からなくて。どうしたんだろう。そりゃあ具合がいつもより悪くて、こいつは元気が無い。だけどそれでもなんか、違うんだ。
「言いたい事あるなら言えよ。何？　別に気とか使わなくていいけど。何なの？」
そう言うと、謎は俺の背中に埋めていた顔を更にぎゅうっと押しつけた。背中全体に伝わる体温とか、背中に当たってる胸とか、そういうのが気になって俺は何だかさっきから落ち着かない。てかおぶってるっていうより、こいつオレに抱きついてるだろ……
するとそんな俺の気持ちをもっと掻き乱すようなことを謎は言った。

「わたし、このままで居る事に不満はないの」

意味が全く理解できなかった。
「は？　どういう事？　このままって……」
やっぱこいつはどこまでも異常で、変人なんだ。
謎、凡人のオレにはお前の考える事は難し過ぎる。
だけど謎はお構いなしに言葉を紡いでいく。
「別にね、身体が弱くたって……いいんだよ、わたし。負い目を感じてる訳じゃないから」
「……けどお前の言い方、何かどっかに未練残してるよ」
そう言うと謎ははっ、と鼻で笑った。

初対面でやられたら確実嫌われるであろう、謎の悪癖だ。実際鼻で笑い飛ばすつもりはないみたいなんだけどな。
「無かったら、今更こんな話切り出さないけど」
「で？　何。言いたい事はっきり言え。意味不明でも、俺は聞くよ」
謎が黙る。

何をそんな内に秘めてるんだ。
苦しみ？　哀しみ？　怒り？　恨み？　妬み？

「ずっと寂しかったんだよ、わたし」

子供みたいな言い分だった。
その割に声は大人っぽくて、何だかアンバランス。

「みんなわたしの事おいていくよ。
わたしがベッドで苦しんでる間に、みんなどんどん大きくなっていってる、肉体的に。
それなのに気持ちだけはわたしの方が大人で、誰に何言ったって分かってもらえるはずもない。
みんなと同じように身体動かしたいって訳じゃない。
だって病弱に生まれたんだから、仕方ないじゃん。
だけどやっぱり、みんなと同じじゃなくたって……思い切り走ってみたいし、動きたい。
わたしね、文芸部だけど、もし身体が丈夫だったら陸上部入ってみたかったんだ。
バスケとかはルールがまどろっこしくて苦手で。
ただひたすら走ってみたいなぁ――――…って……。
別に今の生活に不満はないよ。小説書くの好きだし。
わたし昔から両親は仕事で家に居ないから、家事とかやってて。
そういうの結構楽しいんだ。

わたしみたいに持病が何個もあったってできること、いっぱいあるの。
だけどなんか……憧れちゃうんだ」

初めてこんな事を聞いた。
陸上部に入りたかったのか。
両親は昔から仕事で家を開けていたのか。
毎日家事に追われていたのか。
持病って、１つだけじゃなかったんだ。

俺は何かできないんだろうか。

俺は陸上部に入ってるし、
両親は遅くまでは働いてない。
家事にも追われてないし、
持病なんてない。

「……ならさ、俺が相手してやるよ」
「……どういう、こと」

謎の驚いた声なんてレアだな。そんな事を思いながら言葉を続ける。
「毎日に何か足りないなら、俺が相手になるよ。病弱で外出れないんなら俺がお前んとこ行くし、何だってしてやる。少しはかわんじゃねーの？」
そう言って後ろを振り向いて、俺は笑った。
俺の背中に顔を埋めて、少しだけ顔を上げた謎の目が見えた。
迷子になって、母親に見つけてもらえた子供みたいな。
そんな目だった。
「俺はいつでもお前の。よくねーか？　この取引」

何だってできる気がした。
この、綺麗で意味不明で、理解不能でどうしようもなく淡くて弱い、変人が。
何故か急に愛おしく感じて。
俺はただ守りたかったんだ。謎を。
俺が前に向き直っても、暫く謎は黙っていたけど。
唐突に謎が細い声を出した。
「……ほんと？」
俺はくくく、と笑った。
「こんなとこで嘘ついてどーすんの、オレ」
「いつでもいいんだよね？　寂しかったら呼ぶから来てね？　学校休んだら帰りでいいから、お見舞いきてよ？」
そう細い声で聞いてくる謎は、何だか子供みたいで。案外普通の女の子だった。や、変人なのは変わりないけど。
「いいよ別に。いつだって飛んでってやるよ。あ、けどメアド教えろよ。飛んでくに飛んでけねーから」
そんな俺に謎は微かに笑った。一瞬振り返ると、そんな顔が見えた。
「うん……ありがとう」
彼女が顔を埋めている俺の背中が、暖かく濡れた気がした。

GIRLS×TALK!!

「あっメイ、部屋のカーテン変えた？　かわいー」

7月23日土曜日、午後2時15分。

夏休みに入って数日が経った。わたしは自分の部屋に、親友の櫻井有嘉（くらいありか）を呼んでいた。

有嘉は同じ小学校出身で、小学2年生の頃からの付き合いの親友だ。進んだのも同じ北守中学校で、クラスは違う1年1組。わたしとは正反対で、明るくて友達も多く、陰口なんて滅多に叩かれない人気者だ。ちょっとサバサバしたとこもあって、男子でも普通に話せるし。そんな子がどうしてわたしの親友になったのか、わたしは今でも分からないままなんだけれど。ちょっと内側に癖のついた髪とか、大きい目とか、割と高い身長とか、甘くて可愛い高いソプラノの声とか、全然違う。わたしはストレートの黒髪だし、目が鋭いし、身長はクラスで前から3番目で、澄んでるけど冷静な低いアルトの声をしている。

いつも行ってるお気に入りのケーキ屋で、ガトーショコラとチーズケーキを買って。わたしの部屋のテーブルを向かい合わせに座って話している。吹奏楽部の有嘉は登校日とか土日でも練習がいっぱいある。夏休み中もほぼ毎日練習があって、中学校に入ってからこうして長く話すのは久し振り。話題になるのはやっぱり恋の話だった。

「でね、メアドも交換してそれから時々メールくるの！　それでメールで”ありか”って名前で呼んでくれたんだよ！」

有嘉は中学校に入ってから、同じ1組の男の子に恋をしたみたい

だった。名前は大東俊（だいとうしゅん）。割と・・・いやかなりモテるらしい。身長はそんなに高くなくて（いやわたしよりは勿論デカいけどさ）、女子で背の高い有嘉のちょっと上くらいだった。顔立ちもまぁ整ってる、と思う……わたしのタイプじゃないけど。

ガトーショコラのチョコクリームをフォークの先端でつつきながらぼーっとしていると、不意に有嘉が身を乗り出してきた。
「ねぇっ！　メイは好きな人いないの？」
わたしはフォークをくわえて、「うー」と唸った。
「……むー、うー、あうー……、仲良くなった男の子なら、いるけど」
「誰誰？　４組の人？？　教えてよ」
いきなり食いついてきた有嘉にＷａｏ！！　と驚きつつ、わたしはお気に入りのクマのぬいぐるみ（にゅにゅって名前なんだよ！）を弄びながら言った。
「香織くんだよ、瀬川香織くん」
「あぁー！　瀬川か。え、何？　なんかなれそめっぽいのないの？」
「な、なれそめって……付き合ってもないのに、言い方おかしいじゃない。うん、でも……あるよ、仲良くなったきっかけみたいなのは」
「どんなのどんなの？？」
女子って本当こういう話好きだよね。よくそんな目をＬＥＤ電球の如く輝かせてこっちを見るよ。他人の恋のなんつーかそのアレがそんな楽しいか？
……とまで言っちゃうと有嘉がやばいので、わたしは眉どころか睫毛も動かさずにスルーした。
「わたし、身体弱いじゃない？　で、よく保健室の奥のベッドで眠ってるんだけど――――、香織くん、保健委員だったみたいで。わたしも保健委員だけど、休んでて委員会出た事なくて知らなくて。

で、ある日眠ってて、起きたら枕元に立ってたの。それで、だんだん保健室でいっぱい話すようになったんだ」
「へぇー！　めちゃくちゃいい感じじゃん。やるなメイ」
ニヤニヤしてる有嘉に呆れつつ、わたしはにゅにゅの顔をみよーん、と引っ張ったりしながら続けた。
「それでまたある日なんだけど、生理痛がものっすごく酷くて。1時間目の授業はパスしたんだけど、おさまる気配がなかったの。そしたら香織くん、先生に言って早退できるように手配してくれて。だけどわたしの家誰もいなかったから迎えがこなくて――――香織くん、おぶって家まで送ってくれたんだ」
「きゃ――――っマジで！？　いい！　それいい！　すっごくいい！！　やるじゃん瀬川！！」
うるさ……
わたしの話が終わると同時に絶叫した有嘉の頭を叩いて、わたしは話を続ける。
「それでその時、おぶられながら言ったんだ。身体弱いのがちょっと悔しかったっていうか、なんか溜まってたみたいなのを香織くんに言ったの。そしたら……」
わたしは唇を噛んで、俯いた。
ちょっと顔が赤くなる。
「”毎日に何か足りないなら、俺が相手になるよ。病弱で外出れないんなら俺がお前んとこ行くし、何だってしてやる。少しはかわんじゃねーの？”って。”俺はいつでもお前の。よくねーか？　この取引”って……」
ちょっと笑って言ったら、有嘉は顔を手で覆って、きゃーとかわーとか叫んで、落ち着いてから言った。
「いいじゃんそれ、もうカレカノになれば？　瀬川、絶対メイのこと好きだよ！　あたし応援してるからね！」
「いや待ってよ……あの、まだ何も確率してないの。有嘉、勝手に進めないでよ」

「だって相思相愛じゃない？　おめでとうメイ、あたし親友として祝福するよ！　あーもう幸せそう過ぎっ」
「有嘉、何なのそのノリ。だから女って厄介なんだよ」
「メイも女じゃん。っていうかさ、瀬川とメールとかしてんの？　あいつ携帯持ってんじゃん」
「あ、夏休みに入ってから結構してるよ……ほら、俺が相手になるって言ったから、何かあったらいつでも連絡しろって言われたから」
　すると有嘉は徐にケーキの皿の横にあったわたしの青い携帯電話を開き、いじり始めた。
「ちょっと有嘉さんやめて頂けませんそういうの……」
　奪おうとするも有嘉は立って部屋をうろつき、わたしから逃げやがった。わたしが手をの伸ばしてもダメだ。何せ女子で長身の有嘉とクラスで3番目のわたしとじゃ身長差が１０ｃｍくらいある。
「あっ、”最近風邪ひいてるみたいだけど大丈夫か？”だって～！　メイのクラスの健康観察簿毎日チェックしてんじゃないの瀬川」
「おい有嘉、大概にしろ、そろそろキレるぞ」
「あーっ！　”熱出すとかバカだろ。薬飲んで寝ろよ”だって～♪　この前に3日間休んで寝込んだ時のじゃん！　あたしが心配してメールするといつも返信すぐ来たのに2時間後に返信きたのって瀬川とメールしてたから？　ほらやっぱラブラブじゃーん」
「あ、やめて有嘉さんすいませんもう読み上げないで……？」

１０分後。

　受信ボックスのメインフォルダのほぼ全ての香織くんからのメールを見て、有嘉はやっとわたしに携帯電話を返した。わたしは仕返しのつもりで有嘉のピンクの丸っこい携帯電話を奪って、大東俊からのメールを朗読してみたものの、有嘉は恥ずかしがるどころかデレデレしながら「ね、かっこいいでしょ～！」とか言うからつまんなくなって携帯を返した。

「有嘉最低……あんたの家計を8代末までネギが刻めなくなるように呪ってやる」
「知らないよ！　何その地味な呪い。っていうかさっきからにゅにゅの顔ひっぱったりもんだりすんのやめなって、可哀相だよ」
「うー…」
今度はにゅにゅの耳を引っ張ってみた。引っ張られたせいで目がつりあがっただけだった。にゅにゅがあんまかわいくなくなったからやめた。
有嘉はそんなわたしを見て話を切り出す。
「ていうかさ、メイはぶっちゃけ瀬川のことどう思ってんの？」
わたしは有嘉の顔を見た。珍しく真剣な表情をしていた。
「……嫌いじゃないよ、寧ろ好き？　だと思うけど……優しい人だって思うよ。そっけないし口は悪いけど、すぐ赤くなったりすることか可愛いし、不器用なだけで、わたしに優しくしてくれるから」
もごもごと口にするわたしに、有嘉はにっと笑って言った。
「じゃ、がんば！！　応援してるから」
それはどういう意味を持ってる言葉なんだろう。

ひとりでに過ぎる夏休み

「……夏休みだ」

暇だなぁ。

香織くんは陸上部の練習で、有嘉は吹奏楽部の練習で。他の友達も部活が忙しい。わたしの入ってる文芸部と言えば、小説を書いて部誌に載せてるだけだから夏休み中の活動は無い。

わたしは自室にて、爺ちゃんにねだって買ってもらえたかなーりハイテクっぽいクーラーを操作して２６度に設定する。リモコンをテーブルに置いて溜め息を吐いた。

香織くんとか有嘉とか忙しい人には悪いけど、こうして暇すぎんのも何か、どうなんだろ。こういう思いしてる人、きっと北守中で数人しかいない。北守中は部活動が盛んだから、どの部も忙しい。暇なのは文芸部だけだ。実際、所属部員数も北守中で１番少ない。部活動が成立するギリっギリの５人。３年生が２人、２年生は無し、１年生が３人。

そんな時だった。

ピーンポーン。

自宅のチャイムが鳴った。

いつもは婆ちゃんが出るけど、最近耳が遠いのか気付かず出ない事がある。今回はそういうあれだったらしく、わたしは部屋を出て階段を駆け降りた。わたしの家は築２５年目だから、カメラとか話せるアレとかがついてるインターホンじゃない。

「うぇーいっす。誰すか」

ＷＡＯ！

「ども、謎。謎の携帯番号失くしたからさ、断んないで来ちゃった」

「メイちゃん久しぶりー！　あたしも来たんだけどいい？」

同じ文芸部１年の２人、屋久吉博（やひさよしひろ）と古野雪花（ふるのせっか）であった。

いやー、昨日部屋片付けたんだよね。あー良かった良かった。
２人を部屋に通す。吉博くんと雪花さんはわたしに借りた本を返しに来たらしい。
「ねぇねぇ、この前吉博くんに借りたのっていくらで売ってる？面白かったから欲しいんだけど」
「あー７００円くらいだったかな。てか謎さ、俺に借りてばっかだけど自分で買わないの？」
「買ってるってば。雪花さんがハマってるのは大体持ってる」
「あーそういやメイちゃんに借りたのあれほんっと感動した！」
「でしょ。あれは何て言うかね、人生変わる」
「何それ、俺にも貸してよ。どれ？」
「あーあのね、この文庫のだけど……」

吉博くんも雪花さんも、同じ小学校で同級生だった。
今吉博くんは１組。香織くん程ではないけど背が高くて、銀縁の眼鏡をかけてる。髪の毛はこざっぱりと切ってあって、香織くんとは大違いだ。外見は何か……ザ・文学少年って感じだ。実際性格も真面目で融通が利かないし堅物だし。基本的に突っ込みに回る。いつも可哀相な役目になるタイプ。
雪花さんは３組だ。センター分けの髪を肩位まで伸ばして、校則に則って１つに後ろで束ねている。こちらも長身で、有嘉を超すくらい高い。っていうか香織くんも有嘉も吉博くんも雪花さんも、どうしてわたしの周囲には背が高い奴しか居ないのかね……まぁそれはそうとして。雪花さんは何て言うか、強かでちゃっかりした性格だ。事勿れ主義で、まぁ雪花さんの近くに居れば平和な気がする……穏やかなんだよな！
部屋の中央にあるテーブルにそれぞれ座り、持参した本を取り出す。
「つかさ、ほんと謎んちって本いっぱいあるよね」

吉博くんは振り返り、わたしの本棚を眺めて言った。わたしの部屋は西側に本棚が2個置いてあって、その全面が小説と漫画で埋め尽くされてる。てか本棚に収まんなくなって、棚の上とかに積んであったりするんだけど。そろそろ売ったり捨てたりしないと駄目かな。

「わたしは身体の半分が原稿で出来てるからね、ハハン」

「いや意味分かんないんだけど。何かそのハハンってムカつく」

「よく言われます☆」

「吉博は夢無さ過ぎ！　だからユーモアなくて部誌の小説も人気出ないんじゃないの？」

「ほっといてよ！　雪花も謎も堅物堅物って何なの！？」

「あ、キレた。うへへー。わたしも雪花さんも堅物なんて一言も言ってないのになー」

「吉博自意識過剰なんじゃないの？　あははっ」

「……」

主にわたしと雪花さんは吉博くんをいじってるだけな気がする。あとは小説の貸し借りと、部活での執筆活動とお互いのアドバイス。それ以外にもまぁたわいない話とかいっぱいするけど。部室で。

「っていうかメイちゃん！　何かこの前さ、涼樹(すずき)が”もう終わりにするから。お前の事諦めるから”とか言いだしたの。勝手に始めといて勝手に終わらすとか意味分かんなくない？　あたしの意思とか全然聞いてこないし」

「あーはいはい……」

涼樹っていうのは、フルネームで中村涼樹(なかむらすずき)。これまた同じ小学校の同級生で、今は2組だった。いかにもスポーツ！　って感じの短い髪に日焼けした肌。実際野球やってて運動神経いいんだけど。いつも周りに合わせてアホみたいに騒いでるけど、本当はかなりクールで大人っぽい。そんな涼樹が好きになったのは雪花さんで、その気持ちがクラスの男子にバレて、勿論雪花さん本人にも伝わって行き。それ以来気まずいのだ。雪花さん本人は涼樹は結構タイプだか

ら付き合ってもいいと考えてるのに。
吉博くんはレンズの奥の細い目を更に細め、考えてから呟いた。
「涼樹ってさ、奥手だよね」
「あんたが言うか超絶堅物奥手ヤロー」
「は！？　俺は奥手……だけどちゃんと話すもん！　好きな娘と」
「あーだけど吉博はザ・奥手だよねメイちゃん」
「そっすよね、雪花さん。まー涼樹も涼樹だけど……」
「あ、吉博は優子ちゃんとどうなの？」
「えっ？　いや、どうって……普通、だけど」
優子ちゃんっていうのは吉博くんが好きな娘。わたしはあんま話さない（てか女子とあんま話さない）けど。有嘉と同じ吹奏楽部の娘だったな。
「何かさっきから、本の話から恋愛の話になったね」
雪花さんがわたしの用意した菓子に手を付けながら言う。吉博くんはアップルジュースを一口飲むと、呆れ顔になって言った。
「元はと言えば、雪花が涼樹の話し始めたのが悪いんじゃん」
「いーじゃん別に！　っていうかメイちゃんは？　最近瀬川くんと仲良くない？」
あーやっぱ来ましたかそういう振り……
「そりゃあ同じ小学校であれば大概話せるし」
「へぇー、瀬川と仲いいんだ」
「同じ委員会だからね。っていうか香織くんの事、ほとんどの人が名字で呼ぶんだね」
「あー確かに。瀬川って珍しくないけど、同じ名字の人学年にも居ないから」
下の名前忘れ去られてるんじゃないだろうな。
「ていうか瀬川香織って名前さ、字面的には綺麗だけど男にはあんま合わなくない？」
わーわー。それ言っちゃ駄目じゃないか。香織くんが1番気にしてんだぞ。

「そんな事ないよ。あたしはあの名前、瀬川くんには似合ってると思うけど？　ね、メイちゃん」
「わたしも同感。香織くんは香織くんじゃないと香織くんじゃないでしょ」
「……謎、何言ってるか全然分かんないけど」

時間がきて、吉博くんと雪花さんが帰って。
わたしは静かになった部屋で1人、物思いに耽る。

香織くん。夏休みに入ってメールも電話もしてないし、勿論会ってもない。もう2週間にもなる。
香織くんの声が聞きたいな。香織くんの笑顔が見たい。久しぶりに話して、一緒に笑いたい。

香織くんに、会いたい――――…

Ｈａｐｐｙ Ｂｉｒｔｈｄａｙ，ｔｏ　ｍｅｉ．

会いたいなぁ――――…。

そんなどっかのベタな少女漫画のような、瞳がキラリーン！　って感じの恋に恋して夢を見るヒロインのような事を闇雲に考え、一晩中よく眠れなかったわたしは、案の定寝不足の悲惨な顔で後日登校する事になってしまった。

何で夏休みの癖に学校あんだよ、と言うと――――まぁ、ほらアレだ。保健委員の仕事だよ。北守中は夏休み前の大掃除がない。職員や事務員、その他諸々の大人の方々がやって下さってるらしいが、どうも保健室だけは例外……というか養護教諭が忙しいだけなんだけど。昨夜電話があって、まぁ掃除に来いと。そういう事だ。わたしはいつも委員会に出てないからわたしが抜擢された（されなくてもいいのに）。

という訳で午後3時。わたしは北守中学校に到着した。

夏休みと言えどれっきとした学校な訳で、わたしは暑い中制服で学校内に入った。うーん、まぁ野球部員が走り回ってるグラウンドよりは3倍くらい涼しい気がする。うん。結構暑くもないじゃん。ふふん。

保健室の掃除くらい1年女子1人でもできるっしょー、という養護教諭の考えに東京ドーム並みにデカい殺意を覚えながら、保健室に辿り着く。

「……あー、うん。普通だ」

特に何も変わらん。つまんね。

つーかさ、こんな清潔感溢れまくっちゃってるこの保健室の何処

掃除しろってんだろうね。訳が分からん。このまんまにしてたって別にいいじゃないの。
あー、もうこの際テキトーでいいや。
うーよいしょ、と箒で周りを掃いて、ごみを集め、雑巾がけは面倒だからやめた。それらをやり終えるとベッドのシーツのしわを整えて、ダイブした。終わった。わたし一応やったもんね……あー眠たい。そりゃ昨日寝てないんだもの。当たり前だ。って言うか心なしか貧血になりなりかけてる気がする。
ベッドに腰掛けてあーとかうーとか言ってたら、誰かが入ってきた。
「はわ――――！　あばばばば」
そんな奇声を発してベッドから立ち上がると、聞き覚えのあるような懐かしいような声が聞こえた。
「何してんのメイ、文芸部って夏休み中部活ないよね？」
吹奏楽部で忙しい有嘉であった。
「あばばー、有嘉さんでよかった。今保健委員の仕事で保健室の掃除に来てて、ちとサボってたから」
「あぁー。そっか。あたしはもう吹部の練習終わったの。で、メイがここ入ってくの見えたからさ」
わたしがどんな話をしても大概驚かないのは、有嘉だけだ。聞き慣れたんだろうな、そりゃこんな変人を親友にしちゃあな……
わたしがベッドに腰掛けると、有嘉もわたしの隣に腰掛けた。
「で、もうその掃除は終わったの？」
「まぁ。てか適当にやっただけだもの、終わったって言っていいんだかどうだか」
「あはは、メイは自分のやりたい事以外はめんどくさがるもんねー」
「んな事ないでしょうよ。日用品や晩飯の買い出しだって部屋の掃除だって、高校生にもなってあんな自堕落なお姉の面倒だって、やりたくないにしろやってんじゃないの」
「そーれーは、メイのお父さんもお母さんもいっつも居ないからで

しょ？　だからメイがしっかりしてんであって。メイのお姉ちゃんも全然ダメな人みたいだし。あっねぇ、さっき瀬川に会ったの」
にゅいーん。
そんな感じで心臓が飛び出しそうになった。
「香織くんに？　……で、何か言ったの？」
「うん、これ頼まれた」
そう言って有嘉がわたしに渡したのは、綺麗にラッピングされた紙袋。花柄のその紙袋には、白いリボンまでついてる。手の平に収まらないくらいの、両手で持てる位の。
丁寧にシールをはがして開けると、それはくまのマスコットだった。茶色くて、首に青いリボンをしている。大きさは……テニスボール２個を縦にしたくらい。
「誕生日おめでとう、だって」

あ。

今日……８月１２日だっけ。
わたしの、１３歳の誕生日だ。

「ごめんねメイ、あたしも買ってたんだけどメイがまさか学校に居ると思わなかったから、今ここに無いの。夏休み開けたら渡すから！」
「うん、あ……いいの、全然、構わない、けど」
香織くん、わたしの誕生日、覚えててくれたんだ。
茫然としてるわたしに有嘉が笑って言った。
「この前ね、瀬川がわざわざあたしの事下駄箱で待っててて、そんで聞いてきたの。”謎の誕生日っていつ？”って」
あまりの嬉しさに、世界が滲んで見えた気がした。

一番星とはっぴーめーる。

「誕生日おめでとうメイちゃん、ハッピーバースデー！　って意味同じだけど」

あの後、帰宅して暫くすると家のチャイムが鳴って。扉を開けるとそんな明るい声が聞こえてきた。それは雪花さんで、隣に吉博くんも居た。雪花さんは満面の笑みで、吉博くんはいつもみたいに硬い顔をしていた。

「これ俺から。謎、この文庫の新刊探してたじゃん」

綺麗に包装紙でラッピングされたその本を受け取る。涙が出そうになった。

「あ、これあたしからも！　夏休みだからこの前家族で東京行ったんだけど、そのお土産も兼ねて」

カラフルなビニール袋を差し出される。それを受け取るとわたしは笑った。

「ありがとう！　誕生日、覚えててくれたんだね。あーいや嬉しい嬉しい。わたし明日辺り死ぬんじゃなかろうか」

誕生日を祝ってくれる人がいるのは嬉しい。生まれてきた事を祝ってくれるっていうのは、嬉しい事だと思った。

もう暗くなり、午後6時半。部屋に戻ってプレゼントを開ける。吉博くんから貰った小説と、雪花さんからは青い綺麗なビー玉みたいなストラップ、それと――――香織くんから貰った、くまのマスコット。

くまのマスコットをぎゅっと握り締めた。目をぎゅっと瞑って、そして笑った。

嬉しい。香織くんから。バースデープレゼント。

もう死んでもいいってくらいだった。だけど死ぬ訳にはいかなかった。香織くんにありがとうって、言わなきゃ。そうじゃないと、

わたしは死ねない。

《有嘉からもらいました（＾ω＾）
バースデープレゼントありがとう！
すっごい嬉しいよ♪♪》

メールを送ってみた。そんなに重くない、つもりの内容だったと思う。多分。部活とかで疲れてるだろうから、あんまり連絡しない方がいいと思ってたから。
だけど返信は直ぐに来た。

《気に入ってくれたんなら俺も嬉しい》

胸が高鳴るのが分かった。そっけない文面だった。香織くんらしいな、と思う。
すぐに来た返信にかなり喜びつつ、高速に指を動かす。

《うん！　これからいつもこの子といっしょにいる事にする！
学校でもいっしょがいいな♪　かわいいから。》

するとまた早い返信。

《なくしても知らねぇぞ…
お前、くま１つで浮かれてんのはいいけど
夏休みの課題終わってんの？》

うっ。不意を突かれる。実はあと１０日で夏休み終了なのに課題には手を付けてない。
保健室に入り浸ってるか家でベッドの上で安静かっていうのが多いから、学校の勉強にはついていけてない。小学校の頃はいくら休

んでも大丈夫だったけどな。中間はテスト勉強も全くしてない。その割に２００人中８１位だったけど。

《全然手つけてないよ…（汗）
香織くんは終わったの？
わたしこのままだと
夏休み明けの抜き打ちテストまずいかも！》

有嘉は確か頭いいんだった。何でも母さんが教育ママみたいで塾に行ってるとか。香織くんは５０位くらいだったし、雪花さんに至っては学年１位であらせられる。吉博くんは６４位だっけ。まぁ皆ちゃんと授業受けて勉強してんだろうな……わたしより下の友達はあんまいない…。
うぬぬと考えていると、また携帯電話が鳴る。

《そりゃお前、中間の結果マジでヘボかったもんな（笑）
今度は１００位の方に到達すんじゃねーの？》

ヘボ……っ！？
ひゃ、１００位……三桁には到達したくないのに！　いやでもわたしが悪いのか。授業受けてないのに勉強全くしないから。
あ、そうだ！

《到達…するかも
香織くん、部活休みの日とかってある？
もし良ければその何と言うか
勉強教えて頂きたいなーなんて
思ったり思わなかったり…あはは。》

どさくさに紛れて変な文面のメールを送信してしまった事を大き

く後悔する。わたしは翌日に送信ボックスを見ながら羞恥心に悶絶する訳なのだが、この時は正気じゃなかった。

だって、これって誘ったって事だよ。
断られたら、とか思っちゃうじゃん。
せっかくの夏休み、わたしはほとんど外に出られないから。せめて屋内で何かしたいって思った。せっかくの夏休み。香織くんと少しでも過ごしたかった。

ちょっとでも香織くんと居たいよ。
窓の外で光ってる一番星に祈った――――

瞬間に、携帯が鳴った。
「ひぁっ…！？」
一番星を見つめていただけに、少々びっくり。香織くんからの返信だ。緊張して指が震える。メールの受信ボックスを開こうとして、間違えて新規作成ページにとんでしまう。気を取り直して受信ボックスに辿り着き――――彼からのメール、返事は。

《別いいけど
来週の土曜で部活休みだから
1時にお前の家行くから
そんでいいか？》

「……ぃやった――――っ！！」
思わずその場で飛び跳ねた、一番星の光る夜だった。

少年Xの脳内ラビリンス。（前書き）

悶々と思い悩む男子中学生1名。

少年Xの脳内ラビリンス。

病弱って事からは全く想像できないけど、謎は夏生まれだった。

彼女の誕生日を教えてくれた謎の親友である櫻井は、陽気に笑って言った。

「ほんとだよね。あの性格で容姿で雰囲気で、８月１２日生まれとか有り得ないよー。メイは冬だよ！　病弱で、いっつも冬用の分厚いパジャマ着て、熱冷まシートおでこに貼って、あの綺麗な黒髪ぼさぼさにして、真っ赤な顔で寝込んでるの。部屋のベッドで。ほんっと冬っぽい」

確かにそうだ。櫻井は謎の事をよく知っているんだ、と思った。

ファンシーショップは恥ずかしくて入れなかった。商店街の男でも入れそうな雑貨屋で、女の子が欲しがりそうなものを部活帰りに眺めていた、８月２日。謎の誕生日の１０日前の事だった。

俺が謎の誕生日に何かあげたら、おかしいかな……

そんな感じで悩んでると、部活でミスをした。俺ってバカだな……謎の誕生日の前日、１１日の事だった。

「北守中の部活の顧問の中で１番鬼だろ」――――と部員全員が口を揃えて言う位のかなりスパルタで厳しい陸上部顧問である、平塚先生は俺がミスったと同時に飛んできて、激を飛ばした。

「テメェ何抜かしてんだボケ、夏休み開けには選抜メンバー決まんだぞ！」

「……すみませ「瀬川、お前何考えてたんだ」……は？」

「ボケっとしてたんならテメー何か余計な事考えてやがったんだろが」

「いや、あの……」

「色恋沙汰か」

「は！？　いや違いまっ「反応早ぇってことはそうなんだな、おめぇ部活もろくにできねぇ癖して恋愛沙汰なんて早ぇぞ！！　いいか！？」

顧問平塚をここまで恨んだ日は無かったと思う。怖いってだけで実際通常時は普通に面白い人だったから。だが俺は部活仲間の前で”恋愛沙汰”発言をされた事にかなり恥を覚えたので、平塚先生をキレさせて体育館を追放された事は幸いだった。頭冷やしてこい！

と言われたものの何をすればいいか分からないので、適当にジャージ姿で汗だくのまま階段にドカッとふてくされて座っていると、後ろから声がした。

「何してんの瀬川っ、陸部体育館で自主トレじゃないの？」

謎と違って甘ったるい、高い声だった。数日前に話した櫻井だった。

「……体育館追放された」

「なんでー？」

「ボーっとしてたらミスって平塚がキレた」

「へぇー、メイのこと考えてたんでしょ」

「は！？」

いち早く俺が反応すると、階段の踊り場上から櫻井はけらけら笑った。「分かりやす過ぎー！　瀬川おもしろっ」

……図星ん時は反応しちゃいけないんだった。平塚に言われた時点で学習すべきだった。

「どいつもこいつも何なんだよ、くそ……」

「メイの誕生日、プレゼントあげてよ？」

櫻井がまた笑った。よく笑う奴だと思った。謎とは大違いだ。

「あの娘って友達あんま作んないから、小さな事ですっごい喜ぶの。ちっちゃい子みたいに」

メイって基本は大人っぽいんだけどね、と言うと櫻井は、また階段を駆け上がって行った。吹奏楽部の練習だろう。謎とは違う、明るい天真爛漫な少女。謎が陰なら櫻井は陽だ。あいつは何もかも謎

とは正反対。そんな凸凹な2人だからこそ、親友になったんだろうが。

その日の帰り、また例の雑貨屋に行ってみた。この前見てたコーナー……あった。マスコットのコーナーだ。女子がよく鞄にジャラジャラつけてるのをよく見る。正直あぁいうのは嫌いだ、派手すぎだし。謎はスクールバッグの持ち手に青いリボンを結んでいるだけだった。少しシンプルな方が俺は好き。

そのマスコットの中に1つ、ピンとくるものを見つけた。焦げ茶色の熊で、マスコットにしては大きくぬいぐるみに近いが、ぬいぐるみにしては小さい。その熊の顔が少し謎に似ている、と思った。ぼーっとしてて何を考えているか分からない、不思議な雰囲気も持った表情。そんな謎に似ているマスコット。青いリボンが首についていた。

恥ずかしさを押し殺し、レジでラッピングしてもらって店を出た。それを鞄に入れると、足早に家に向かった。

翌日。彼女の誕生日だった。けたたましい音を出す目覚まし時計は、いつも通り7時ぴったりに鳴った。それを停めて適当に身支度を済ませる。学校指定ではない黒と青のジャージを着て、スポーツバッグを持って家を出た。タオルやドリンクや運動靴に弁当。その中に、ラッピングされたそれも入れて行った。玄関でそれを弟の水鳥（みどり）に見られた。それは何だ、誰にあげるの、まさか女の子？　もしかして彼女――――10歳の癖にやけに耳年増だなオイと思いながら「うっせぇ」と言ったけど、顔が不覚にも赤くなっていたので迫力も威厳もなくて、水鳥を黙らせるには足りなかった。色々と。

文芸部である謎が、何故かその日に学校に来ていた事は知っていた。4組の下駄箱に、小さな白いリボンのついてる変わったローファーが置いてあったから。けど勿論直接渡す勇気なんてこれっぽっ

ちも無くて。部活の休憩時間に櫻井を捕まえて、「あいつに渡しといて」ってだけ言って逃げた。それ以上は恥ずかしくて身が持たなくて、練習に戻ると恥ずかしさとか期待とか不安とか、色んな感情を掻き消したいが為に自主トレに打ち込んだ。

ミスもないまま部活は5時に終わった。その後に友達とかとふざけて体育館で適当なバカみてーな遊びをしていると、顧問に怒られてまた筋トレが始まった。畜生…

その後は皆、有無言わずに帰った。俺は落ち着かずに皆が帰った後も、校舎内をうろうろしてた。ほとぼりが冷めて、下駄箱で靴を履き替える。”１４１２”と生徒番号が書かれた下駄箱の中は、もうローファーはなくなっていた。何だか切ない気持ちになる。

すると鞄の中で携帯が鳴った。このメロディは謎からのメールだ。胸が大きくどきん、と鳴った気がした。携帯を開くと、嬉しそうな彼女の文面が目に飛び込んできた。

気に入ってくれたんだな――――思わず笑った。俺は安心した。そして喜んでいた。

すこし顔が熱くなった。返信して外に出ると、辺りがもう暗くなっていた。7時を過ぎていた。

冷えた汗を拭う。夏の風の匂いがした。

全身で恋する女の子

「あぁあぁぁぁぁぁりかぁぁあぁぁあ～！！！」

メイの誕生日の翌日。あたしが部活を終えて、友達と帰ろうとして下駄箱にいたらメイが後ろからあたしの背中を勢いよく押した。声だけでメイだと分かったから、あたしは振り返る前に叫んだ。

「何なのメイ！　変な声出して、も～…」

振り返ると、めちゃくちゃ赤い顔してるメイがそこに居て。メイの事を明らかに「怪しい…」的な目で見つめる友達を先に帰して自分の鞄を下駄箱に置き、取り敢えず1年4組――メイの教室に入って、座って話を始める。

「で、どしたの？」

聞くと、メイは真っ赤な顔で「うぅ～…」と机に突っ伏した後、ぼそぼそと語り始めた。

「昨日ね、香織くんとメールしてたらね～…、ら、来週の土曜日、わたしの部屋で勉強教えてくれるって……ふたりきりで」

「えぇ～っ！？　マっジっでっ！？　っきゃー…ふたりっきりだって！　いいなぁ～！」

「そんな大きな声で言わなくてもいいじゃん……」

メイの目から、女の子のピンクのオーラが出てるのが見える気がした。メイはあたしと出会った時からポーカーフェイス。だけど最近、喜怒哀楽が前より激しくなった。まぁでも普通の女の子よりはまだまだポーカーフェイスなんだけど……

きっと、瀬川のせいだ――――そう思った。

だってあたしたち、乙女ってそういうものだもんね。

「瀬川の私服姿見るチャンスじゃない？　あいつ無駄に脚長いしスタイルいいからさ、絶対ジーンズ似合うと思うんだよね～、しかも

イケメンだし」
「あ、有嘉……無駄にって何なの、無駄にって」
「別にー。　っていうかメイはどーすんの？　土曜日って言ったらあと4日じゃん！　服買わないの～？」
「実は買いました♪」
メイがふざけてウィンクとピースをした。こいつ無駄にウィンクうまいな。
「青いリボンついた白いワンピースなんだけど……半袖で、袖んとこにレースついてるの」
「え～っマジで？　メイ絶対似合う！　メイの顔って清楚な感じするから、白ワンピ合うよ」
「そう？　ありがと～…。」

あの瀬川がねぇ。メイに優しいのか。

メイは変わった、と改めて感じた。
メイはいつで病弱で意味不明で、綺麗な女の子。しかめっ面のポーカーフェイスは何を考えてるか分からない。あたしはこの娘と親友になって5年経つけど、未だにメイがどんな事を思って感じてるのかなんてわかんない。まぁそれでも行動パターンとか言ってる事とかはまだ分かるけど。メイの珍行動に驚かないのはきっとあたしだけ。学年の7割くらいの女子と普通に話せる位のあたしと、恐らく気軽に話せる女子は1割にも満たないであろう正反対のあたし達。あたしは廊下歩いててもよく声掛けられる感じで友達が多い。で、メイはと言えばあたしが誰と話そうが、その隣で黙って無表情を貫くから誰もメイに話しかけない。曰く女子の高い騒ぎ声が大嫌いらしい。全く別の意味で目立つあたし達が一緒にいると、何だか空気が異質になる。
メイは名前通り謎が多いし。あんま見せたりしないけど、左腕にいつでも巻いてる真っ白い包帯とかね。あれを見てるのに瀬川が何

も聞いてこないのは遠慮してんのかな。そこらへんの女の子達はメイに話しかけられない分、あたしに聞いてくるけど。

「あの娘、何でいつも腕に包帯巻いてるの」って――――。

大好きな親友の秘密だもん、

教えてあげたりなんかしないけどね。

だけどね瀬川、あんたにならメイのどんな事でも教えてあげたっていいよ。

メイをおぶって家まで送ってくれて、助けてくれて、心配しえくえて気遣ってくれて。どー見たってそんな雰囲気なのに、もどかしいっての。

あんたの胸ん中、きっとメイを思う気持ちでいっぱいなんだよね。

「ねぇ、メイ」

「何、有嘉」

「よかったね、誰よりメイを大事にしてくれる人がすぐ近くに現れて」

そう言ったあたしを見て、メイは笑った。

「それって有嘉の事？　そりゃ有嘉はわたしの親友だもの」

あたしはメイの脚を軽く蹴った。

「ちょ、何よ有嘉さん」

「メイの鈍感ー。知らないよっ！」

そう言われて笑ったメイは、きっとすごく綺麗だった。

全身で恋する女の子（後書き）

メイの左腕には常時包帯が巻かれている事が判明。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1695s/

保健室の眠り姫

2011年10月1日03時11分発行